

〈論文〉

# 白村江直後における熊津都督府の対倭外交 朝鮮半島西南地域と北部九州にみる交流史の視点から

近藤 浩一

## 抄録

663年の白村江敗戦後の日朝・日唐関係史には重層な研究史が存在するが、大半は倭国側の防衛や国家体制の整備からの視点であり、対象国もこの後半島を統一した新羅に重点が置かれた。しかしながら、白村江翌年の664年（戦後初）から665年・667年とたて続けて倭国に使節を派遣したのは、660年の百済滅亡後にその半島西南地域に置かれた唐の熊津都督府であった。なお旧百済地域は、6・7世紀以来肥後を含む北部九州と独自のネットワークを築き、活発な交流を展開してきた。本稿は、本来戦勝国であり外交交渉を主導した側の熊津都督府の立場に立って、歴史的な百済・倭間の両地域のもつ前史も踏まえつつ、日本古代史の側からは研究蓄積が豊富な当代の朝鮮半島と倭国の外交・交流史を再考したものである。

## はじめに

663年の白村江敗戦後の日朝・日唐関係史については、戦前の池内宏氏以来、戦後の木宮泰彦・森克己・鬼頭清明・鈴木靖民、近年の新蔵正道・森公章・仁藤敦史などの諸氏にいたるまで重層な研究史が存在する（詳細は注1の論著を参照<sup>1)</sup>）。しかしながら、既存の研究では、例えば古代山城築城に始まる倭国の防衛体制の強化及び国家体制の整備のなかで触れられることが大半で、本来戦勝国であり外交交渉を主導した

側の旧百済に置かれた唐の熊津都督府にスポットをあてられることはほとんどなかった。また、旧百済地域（半島西南地域）と倭国の北部九州は歴史的にも深い交流をもっていたが、白村江以後の両国の外交に両地域の交流史が加味されることも皆無である。したがって本稿では、熊津都督府側の立場に立って、歴史的な両地域のもつ前史も踏まえつつ、日本古代史の側からは研究蓄積が豊富な当代の朝鮮半島と倭国の外交・交流史を再考してみたい。なおこうした作業は、既存の研究で盛んな倭国の内政・外交史に関わる諸問題にも一石を投じることになろう。

## 1. 白村江前後・唐の熊津都督府による旧百済地域支配

百済は顕慶5年（660）に蘇定方により平定されると、義慈王と臣僚らは唐に連行され、旧百済地域は唐によって管理された。当初唐は、百済故地に熊津都督府をはじめ馬韓・東明・金漣・徳安の5都督府を設置し、熊津都督に王文度を充てた他はそれぞれの州県の酋長を都督等として立てる羈縻支配を行った<sup>2</sup>。旧百済の王都泗泚城の中央に位置する定林寺の五重石塔には、戦勝記念碑といえる「大唐平百済国碑銘」が刻まれており、そこにも「凡置五都督、卅七州二百五十県、戸廿四万、口六百廿万。各齊編戸、咸変夷風。」とみられる。

その直後各地では百済復興運動が起きたが、663年に白村江で倭軍を破ってからは、唐は百済故地の支配権を手中に収めた。そして唐は新羅に対しても、白村江直前の龍朔3年（新羅文武王3・663）4月に新羅を雞林州都督府、文武王を雞林州都督とし<sup>3</sup>、名目上唐の一つの州に組み入れている。ただ、白村江直後より唐の旧百済支配及び新羅への対応は、対高句麗戦を意識して穏便な政策に転じたといえる。

また次の①は、麟徳元年（664）十月に熊津都督劉仁軌が百済故地への守備兵の増強を要請する場面であるが、

①檢校熊津都督劉仁軌上言・・・陛下留兵海外、欲殄滅高麗。百済、高麗、旧相党援、倭人雖遠、亦共為影響、若無鎮兵、還成一国。・・・仁軌謂仁願曰、国家懸軍海外、欲以經略高麗、其事非易。今收穫未畢、而軍吏与士卒一時代去、軍将又歸、夷人新服、衆心未安、必将生變。不如且留旧兵、漸令收穫、弁具資糧、節級遣還。・・・乃上表陳便宜、自請留鎮海東、上從之。仍以扶余隆為熊津都尉、使招輯其余衆。（『資治通鑑』麟徳元年（664）冬十月庚辰条）

その中で百済故地には高句麗・倭人と通じる者もいて、領内が不安定のなかで軍吏と

士卒を同時に交代するような旧百濟人たちに動揺を与える政策は慎むべきだと提言し、その過程で前百濟太子の扶余隆を熊津都督として赴任させている。さらに『新唐書』劉仁軌伝では、百濟故地及び遺民の管理における懐柔策の一環として劉仁軌が扶余隆を熊津都督に推薦しているのがみられる。ただ扶余隆は、『三国史記』文武王 4 年(664) 2 月条に熊津で唐の勅使とともに新羅王子の金仁問と会盟したとあるため、2 月の時点ですでに帰国していた可能性はあり得る。ともあれ唐は、詳細は後述するが百濟王子のみならず多数の旧百濟官人を赴任させることで故地の安定をはかろうとし、彼らの尽力によって翌年の麟徳 2 年(文武王 5 年・665) 8 月には、次の通りその扶余隆と新羅文武王の会盟を実現させている。

② 〈1〉 秋八月、王与勅使劉仁願・熊津都督扶余隆、盟于熊津就利山。(『三国史記』文武王 5 年(665) 秋 8 月条)

〈2〉 又於就利山築壇、对勅使劉仁願、歃血相盟、山河為誓、画界立封、永為疆界。(『三国史記』文武王 11 年(671) 文武王書)

この会盟は熊津就利山で行われたが、両者は互いの領土に介入しないことを誓い、白村江以後不明確であった両国の領土問題が一端解決したのであった。この会盟に至った経緯並びに模様は、後述の⑭『冊府元龜』により詳しく記録されている。

これに合わせて、唐配下の都督府による百濟故地の支配体制もいくらか変化を遂げている。白村江直後の麟徳年間(664～665)には、唐本国の地方統治体制(都督府・州・県)に倣い次のように、

③ 都督府一十三、嶠夷、神丘、尹城、本悦己、……。 東明州 四、熊津、本熊津、……。 支溇州 九、己汶、本今勿、……。 魯山州 六、魯山、本甘勿阿、……。 古四州 本古沙夫里 五、……。 沙泮州 本号尸伊城 四、……。 帶方州 本竹軍城 六、……。 分嵯州 本波知城 四、……。 (『三国史記』地理 4 都督府 7 州条)

5 都督府体制を辞めて都督府は熊津都督府のみとし、その下に 7 州・51 県を置く体制に再編成されている。なおこの③の内容は、年代が記されず冒頭の都督府の名も無名であるためいつの地方制度であるか不明であったが、末松保和氏の緻密な考証により 7 州 51 県の地名比定がなされたことで、665 年 8 月の百濟と新羅の会盟の際に約束された熊津都督府の領域であることが明らかになった。特にこの末松氏の地名比定で重要なことは、熊津都督府の所在地を百濟の都であった現在の扶余、東明州を公州

としたことである（各州県の位置は、末松保和 1996、鄭求福他 1997 を参照）。すなわち熊津都督府も旧百済の都城並びに行政システムの多くを継承したといえる。ただ、盧重国氏の指摘によれば、1 都督府・7 州・51 県体制を当初の 5 都督・37 州・250 県体制と比較すると、4 つの都督府と 30 の州、199 の県が減っており、これは旧百済故地に新羅の勢力が介入し多くの地域を失ったためではないかという。さらに盧氏は、都督府配下の 7 州・51 県の位置が概ね忠南・全北・全南の西海岸地域に集中しているのは、熊津都督府の西南地域に対する比重が一層増したと想定されている（盧重国 2003）。

このように百済を滅ぼした唐は、性格の変化はあるものの熊津都督府を介して朝鮮半島の支配に乗り出したのであった。さて、熊津都督府が直接管轄した旧百済地域は半島のなかでも西南部であり、それらの地域は後述するように歴史的にも古くから倭国と交流があった。上の史料①の下線部（『旧唐書』劉仁軌伝にも「陛下若欲殄滅、不可棄百済土地、余豊在北、余勇在南、百済高麗旧相党援、倭人雖遠、亦相影響、若無兵馬、還成一国」とある）によると、百済鎮将側は白村江で倭国に勝利しながらも、倭人・倭国を百済遺民の連携・結合の対象となり得るとして警戒していたのであった。それゆえ都督府は、対高句麗戦などのために、倭国とも積極的な交渉を望んだと推察される。以下、熊津都督府による対倭政策・外交の実体を、対新羅・半島政策も踏まえながら検討してみたい。

## 2. 熊津都督府による百済遺民の登用と対倭政策—禰軍を中心に—

熊津都督府は、白村江勝利後の翌年の 664 年からたて続けて倭国に使者を派遣している（既存の研究史は注 1 の論著を参照）。次の記録がその初回であるが（『日本書紀』の記録は簡略であるが、『善隣国宝記』に使節の詳しい事情が記されている）、当初の外交は戦後処理の問題と絡んでおり都督府の対倭政策の方針が明確に表れていると推察される。

④夏五月戊申朔甲子、百済鎮将劉仁願、遣朝散大夫郭務悰等、進表函与献物。……冬十月乙亥朔、宣発遣郭務悰等勅、是日、中臣内臣、遣沙門智祥、賜物於郭務悰。戊寅、饗賜郭務悰等。……十二月甲戌朔乙酉、郭務悰等罷歸。（『日本書紀』天智 3 年（664）条）

⑤海外国記曰、天智三年四月、大唐客来朝。大使朝散大夫上柱国郭務悰等卅人、百済佐平禰軍等百余人、到对馬島、遣大山中采女通信侶、僧智弁等来、喚客於別館、……一二月、博徳授客等牒書一函、函上著鎮西將軍、日本鎮西筑紫大將軍牒在百済国大唐

行軍総管、使人朝散大夫郭務悰等至、披覽来牒、尋省意趣、既非天子使、又無天子書、唯是総管使、乃為執事牒、牒是私意、唯須口奏、人非公使、不令入京、云々。(『善隣国宝記』卷上所引「海外国記」)

この史料は、倭の中央政府が対馬に来た百濟鎮將(熊津都督府)の使節郭務悰らを尋問するために使者を派遣し、筑紫大宰府に呼び寄せ使節の性格・持参した牒書などをもとに入京の是非を検討した場面である。この具体的な内容は既存の研究で詳細に言及されており(堀敏一 1998 など)、ここでは倭王権が下した結論のみを述べれば、百濟鎮將の派遣した使節は私使であって唐皇帝の公の使人でないという理由で帰還させるというものである。この時筑紫大宰府が郭務悰らに百濟鎮將宛の牒書を託していることから、倭王権は熊津都督府を大宰府と同等の機関とみなしていたという指摘もある(鈴木靖民 2011 b)。こうした倭王権の対応はいわば戦勝国と敗戦国の関係に反していたが、熊津都督府側はそれを責めることはせず、形だけであれ倭国の要望を聞き入れ、翌年に次の⑥の唐国本国の朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高を首席として、前年度の郭務悰らを伴いながら派遣している。

⑥九月庚午朔壬辰、唐国遣朝散大夫沂州司馬上柱国劉徳高等。等謂右戎衛郎将上柱国百濟禰軍・朝散大夫上柱国郭務悰、凡二百五十四人、七月廿八日、至于对馬、九月廿日、至于筑紫、廿二日進表函焉。冬十月己亥朔己酉、大闕于菟道。十一月己巳朔辛巳、饗賜劉徳高等。十二月戊戌朔辛亥、賜物於劉徳高等。是月、劉徳高等罷歸。是歲、遣小錦守君大石等於大唐、云々。等謂小山坂合部連石積・大小乙吉士岐弥・吉士針間、蓋送唐使人乎。(『日本書紀』天智4年(665)条)

ただし664年と665年の使節団の編成は、指摘されているように後者の首席の劉徳高も唐の官名を称するだけで郭務悰とほぼ同格(朝散大夫)であって、両者とも占領軍の唐人と百濟人から作られていて、若干の増員はあるが性格的に同じであったと考えられる(鈴木靖民 2011 b)。使節団の主要ポストに唐人の郭務悰と旧百濟官僚佐平の禰軍が二度とも加わっているのは、そのことを一層示唆する。ともあれ、⑥によるとこの時は倭国も使節団を受け入れ、さらに同年に遣唐使を送っている。

ここで改めて注目されるのは、両年とも倭国に多数の百濟人を派遣している点である。664年の際には、唐人が30名であるのに対して禰軍を筆頭とする百濟人は百名以上加わっているのがわかる(使節団の性格が同じであるため、増員された665年には一層多くの百濟人を派遣したであろう)。また、熊津都督府は2年後の667年に

も送使であるが再度倭国に使節を派遣しており、

⑦十一月丁巳朔乙丑、百濟鎮將劉仁願、遣熊津都督府熊山県令上柱国司馬法聰等、送大山下境部連石積等於筑紫都督府。己巳、司馬法聰等罷歸。以小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石、為送使。(『日本書紀』天智6年(667)11月条)

その代表格である法聰も司馬を付しているが百濟人と推察されている(池内宏1960、盧重国2003)。後述する⑩の下線部をみると、そこでは唐人を最初に載せその後に旧百濟人の名を記しているが、百濟人である司馬禰軍のあとにこの司馬法聰が出てきていることから、法聰は百濟人であることが確かめられる。

とすれば、熊津都督府は佐平禰軍を筆頭に、旧百濟人を白村江の戦後処理を担う対倭外交に積極的に活用したといえるのではないか。ここから熊津都督府の対倭政策の一端が読み取れるが、何より禰軍は、『三国史記』に加えて公開された墓誌銘によって、旧百濟地域の支配や対新羅を中心とする半島政策に一層従事していたことが窺い知られる。こうした禰軍の活動は、彼が対倭外交で期待された役割や都督府の対倭政策とも直接関係すると思われるので、その活躍の様子を確認し、改めて倭国との関係に戻ってみたい。まず次の『三国史記』では、670年前後から唐(熊津都督府)と新羅の関係が悪化した様子を詳述しているが、そうした緊迫状態を伝える中に禰軍の活動がみられるのである。

⑧王疑百濟殘衆反覆、遣大阿滄儒敦於熊津都督府請和、不從。乃遣司馬禰軍窺覘。王知謀我、止禰軍不送、拳兵討百濟。(『三国史記』文武王十年(670)秋7月条)

⑨至咸亨元年(670)六月、高麗謀叛、搃殺漢官。新羅即欲發兵、先報熊津云、「高麗既叛、不可不伐。彼此俱是帝臣。理須同討凶賊、發兵之事、須有平章。請遣官人来此、共相計会。」百濟司馬禰軍来此、遂共平章云、「發兵已後、既恐彼此相疑。宜令兩処官人互相交質。」(『三国史記』文武王11年(671)所載・文武王「答薛仁貴書」)

⑩・・・由是獲罪大朝。遂遣級滄原川・奈麻辺山及、所留兵船郎將鉗耳大侯・萊州司馬王芸・本烈州長史王益・熊州都督府司馬禰軍・曾山司馬法聰、軍士一百七十人、上表乞罪曰。(『三国史記』文武王12年(672)9月条)

⑧は、新羅側(王は文武王)からの記録であるが、熊津都督府は禰軍を新羅に派遣してスパイ行為(窺覘)にあたらせ、それを察知した新羅が彼を拘束したことを伝える。禰軍が新羅でいかなる活動をしていたかは不明だが、⑨には文武王が6月に高句麗の

反乱に対して熊津都督府と共同して討伐に当たることを申し入れたと記している。だが『三国史記』文武王十年（670）6月条をみると、新羅が旧百済の要所である金馬渚（全羅北道益山）に668年に唐が滅ぼした高句麗の貴族安勝を安置したと記している。このことから、禰軍が新羅にいたのは両者の争いのためであったと推定される。そして⑩には、672年9月に新羅に2年近く抑留されていた禰軍や法聡を含む、唐人と百済人を唐（都督府）に送り返したことを記している。ともあれ上の史料を通して、禰軍らは百済遺民でありながら都督府のなかで存亡に関わる政治・外交に関与していたことがわかる。

加えて近年、「禰軍墓誌」が拓本写真と釈文であれ公開されたことで（王連龍2011）、前述の外交活動に加えて墓主・禰軍本人とその先祖の事績全般を知り得るようになった（東野治之2012、李成市2013、崔尚基2014など<sup>4</sup>）。ここで取り上げる禰軍の対倭外交についても、一次資料の墓誌には編纂史料にみられない彼の立場・認識や彼の属した熊津都督府の実情が数多く記されている。最近の研究に倣いこの墓誌の内容を取り上げてみたいが、長文であるのでここでは彼自身の実績・生涯（⑩は内容から便宜上[1]～[4]に分けた）に関わる部分のみ触れたい。

⑩ [1] 去顯慶五年、官軍平本藩日、見機識變、杖劔知歸、似由余之出戎、如金磧之入漢。聖上嘉歎、擢以榮班、授右武衛滄川府折衝都尉。 [2] 于時日本餘噍、據扶桑以逋誅。風谷遺眈、負盤桃而阻固。萬騎巨野、与盖馬以驚塵。千艘橫波、援原地而縱沝(1)。以公格謨海左、龜鏡瀛東、特在簡帝、往戸招慰(2)。公徇臣節而投命、歌皇華以載馳(3)。飛汎海之蒼鷹、翥凌山之赤雀。決河背而天吳靜、鑿風隧而雲路通。驚鳧失侶、濟不終夕。遂能說暢天威、喻以禍福千秋(4)。僭帝一旦稱臣。仍領大首望數十人、將入朝謁。特蒙恩詔授左戎衛郎將(5)。 [3] 少選遷右領軍衛中郎將兼檢校熊津都督府司馬。材光千里之足、仁副百城之心。舉燭靈臺器標於芄穧。懸月神府、芳掩於桂苻。衣錦晝行、富貴無革。藿蒲夜寢、字育有方。去咸亨三年十一月廿一日。詔授右威衛將軍。局影彤闕、飾躬紫陛。亟蒙榮晉、驟歷便繁。方謂克壯清猷、永綏多祐。 [4] 豈曷曦馳易往、霜凋馬陵之樹、川閱難留、風驚龍驤之水。以儀鳳三年歲在戊寅二月朔戊子十九日景午遘疾、薨於雍州長安縣之延壽里第。春秋六十有六。

熊津岬夷（扶余又は公州）出身の禰軍は、[1]と[4]の下線部によれば、百済が唐に滅ぼされた顯慶5年（660）に唐にくんだり官職を授けられ、その後は唐に仕えて儀鳳3年（678）に66歳で亡くなっている<sup>5</sup>。[2]は、まさに彼の対外交渉での活躍を記した箇所であるが、既存の研究では下線部(1)の冒頭の「日本」が国号としての日本

なのかが論議的となった。しかし最近李成市氏は、「日本」は唐からみた東方を意味する語句のためすなわち百済のことであり、その下の「扶桑」「風谷」「盤桃」のいずれも東方を指す呼称であって、文脈を検討してみるに順に倭、高句麗、新羅を指し、全体としては「時に百済の残党は倭に依拠して誅罰を逃れていた。高句麗の残党は新羅を拠点にして堅固であった」と解釈すべきと提言している（李成市 2013・2014）。李氏の見解は、白村江以後の東アジア情勢とまさに符合しており説得力に富む。とすると、下線部(2)以下は(1)の状況を打開するために禰軍がとった行動の内容ということになる。使者として当初の業績を述べた(3)は、彼が戦後すぐの664年と665年に倭国に派遣されたこととみてよいだろう。(3)以下は、『日本書紀』の内容を補足して彼が使節団の中核として迅速に倭国に赴き、(4)のように戦後交渉にあたったことを伝えている。そして何より、唐皇帝が彼にそれを託した理由を、(2)のように海左（海東、すなわち百済国）での経験を見込んでのものであったことを明記しているのは興味深い。また、彼が対倭交渉のみならず新羅を中心とする半島政策に従事していたことは前述したが、(5)は⑧～⑩の『三国史記』の記録とも一致するのである。さらに墓誌からは、こうした対外活動によって禰軍の官職が徐々に上昇していることもわかる。

ところで、⑦の667年に倭に派遣された百済人の司馬法聡は熊津都督府の熊山県（熊津県とみられる）の県令に任じられていたが、[3]によると、禰軍も旧百済に帰国後は検校熊津都督府司馬として活躍した様子が読み取れる。さらに一族（禰軍弟）の禰寔進も、「禰寔進墓誌」によって東明州の長史であったことが指摘されている（金栄官 2012、権恵永 2012）。このように多くの百済人が熊津都督府の官吏に登用されていたのである。白村江前後の熊津都督府は、元々敵対関係にあったが同地域に精通する百済遺民に登用することによって、半島支配を展開したことが窺い知られる。禰軍の例にみるように、特に倭との交渉には古くからそれと関係の深かった百済官人を積極登用したと考えられる。禰軍が都督府配下の旧百済に帰国した年は定かではないが、都督府主導で倭に派遣された664年にはすでに帰国していたので（扶余隆の帰国よりは後と考えられる）、唐は戦後の対倭交渉を担わせるために彼をわざわざ帰国させたともみられる。そして何より「禰軍墓誌」によると（墓誌の性格上、主人公及び一族への個人的な解釈は加味されているが）、彼の対倭交渉は一定の成果を収めたといえる。

ともあれ、白村江以後の熊津都督府が百済遺民を介して対倭外交に従事している様子を論じたが、実際に対倭交渉にあたった禰軍の墓誌銘からは、そこに記された「日本」は国号を指していないことは明確であっても、都督府側が倭国を相当意識



して外交にのぞんだ様子が窺い知られた。さらに熊津都督府は、旧百済の対倭交渉・交流ルートを確保しようと働きかけていたといえる。唐からみて倭国は敗戦国であっても、旧百済地域の安定した支配には対倭政策が必須であったことを物語っている。

### 3. 熊津都督府からみた倭人とその活動前史

繰り返しになるが白村江直後の熊津都督府の対倭外交は、倭国に勝利しながらも、百済滅亡以前の百済人と倭国の緊密なネットワークをうまく活用することで開始された。こうした対倭政策の背景には、上の史料①の下線部で百済鎮将劉仁軌が百済遺民と倭人の関係を案じていたような状況にあったことを指摘した。それでは、警戒するほどの倭人・倭国と百済遺民の連携・結合をなし得るにいたる両地域間の関係が注目される。ここで最初に想起されるのは、6・7世紀以来の旧百済（半島西南地域）と北部九州の間で展開された交流史であろう。まずやや冗長になるが、これを理解するうえで重要と思われるので、簡単に整理してみたい。そして、白村江後の両地域間の実体についても検討してみる。

#### (1) 旧百済地域と北部九州の倭人—両地域間の交流史に遡る—

肥後地域までを含む北部九州と半島西南地域の緊密な関係は、史資料からも菊池川流域の江田船山古墳、筑紫君磐井の時代まで遡る。まず、出土した鉄刀銘から5世紀後半のワカタケル大王（雄略天皇・倭王武）に典曹人として奉仕した火（肥）国の豪族が被葬者であることがわかっている江田船山古墳では、百済系の冠・耳飾り・履・馬具などの金属製品（南海岸に注ぐ蟾津江流域の加耶系を含む）及び百済系陶質土器が多数出土している（玉名歴史研究会 2002 など）。上の鉄刀銘を通しては、「作刀者」の倭人技術者以外に「書者張安」という文筆を担う渡来人が肥後の豪族配下にいたことも窺わせる。

また『日本書紀』には、雄略23年（479）に三斤王の死後倭国から百済に帰国する東城王を高句麗から護衛するために筑紫国軍士500人を派遣したとあるなど、5世紀後半から6世紀前半に倭王権と百済が親密な対外交渉を展開したことを記している。この当時百済は、475年に高句麗の攻撃によって蓋鹵王と王都漢城を失い熊津（公州）に逃れたが、遷都後に王権強化と支配体制の整備に努めると西南部の栄山江流域（慕韓とみる説が多い）を領有化し、その近くの蟾津江流域の大加耶圏の西部に進出している。学界でも議論の尽きることない全羅南道の栄山江流域に前方後円墳が出現

するのはこの時期である。これらの古墳十数基は、5世紀第2四半期から6世紀第2四半期前半までの短期間に突如として現われるが、造営者・被葬者については諸説ある（研究史及び諸説の概要は朴天秀 2007 を参照）。詳細はここでは触れないが朴天秀氏や柳沢一男氏などの近年の研究では、その石室の構造、副葬品の分析等から北部九州、とりわけ肥後地域の倭人（工人）が関与したことが明らかにされている（朴天秀 2007・2008、柳沢一男 2014）。やや飛躍すれば、肥後・北部九州の豪族による有明海ルートを使用した交流が半島西南地域の前方後円墳（倭系古墳）の造営に繋がったとしている<sup>6</sup>。それならば豪族たちは、5世紀後半においては独自に半島西南地域との交流ルートを保持していたのである。肥後地域の豪族と近畿の氏族との関係は近年馬門ピンク石製石棺の広がりなどを通して指摘されているが（柳沢一男 2014）、倭王権の対外交渉は北部九州から肥後地域と朝鮮半島の間で築かれた地域間交流の延長線上に位置していたといえる。

そうしたなかで、肥後を含む北部九州と半島西南地域間で半ば独占的な交通網を築いた豪族に筑紫君磐井がいる。磐井の墓は、『筑後国風土記』逸文によって肥後に隣接する筑後の福岡県八女市の岩戸山古墳（八女古墳群）と考えられ、有明海一帯を中心に5世紀後半から6世紀前半にかけて北部九州・豊国にも広がる火国の阿蘇凝灰岩を材料とした石人・石馬の分布圏が彼の勢力圏とされている（小田富士雄編 1985・1991）。広範囲なネットワークをもつ磐井による反乱は、『日本書紀』に継体 21 年（527）から翌 22 年（528）まで詳細な記録がある。乱の性格をめぐっても、ここでは詳述しないが多くの研究がある（山尾幸久 1999、佐藤信 2005、篠川賢 2010 など）。

該当史料<sup>7</sup>によると、筑紫国・火国・豊国を勢力基盤とした筑紫君磐井は、まず新羅との特別な関係はもとより、高句麗・百済・新羅・加耶などからの貢職船（外交使節）を招致できる立場にあったことが読み取れる。また、毛野臣との関係を示す記録や何より彼の本拠地の阿蘇凝灰岩の石製品品の広がりを通して、継体大王をはじめ西日本各地の諸勢力とも連携していたと指摘されている（水谷千秋 2013）。『日本書紀』では磐井討伐を正当化するために彼の言動を反王権行為とみなすが、諸国の使節が彼のもとを訪れていることは、当時の半島勢力並びに畿内の倭王権共々が磐井をパイプに対外交渉を成立させていたことを意味する。先に述べた栄山江流域の前方後円墳の石室を造営した肥後地域の工人も、最近の研究では古墳の築造期と磐井の活動期が一致することから、百済の要請のもと磐井が派遣した集団として評価されることがある（柳沢一男 2014）。彼が賄賂を得ていた記録から新羅との関係を重視する見解もあるが（山尾幸久 1999）、北部九州の豪族勢力と深い関係にあった半島西南地域の栄山江流域に程近い蟾津江流域では、百済と加耶諸国・背後に新羅などがしのぎを削ってい

た。当時倭国と朝鮮半島をめぐる交流のルートは複数存在したようだが、磐井は有明海地域（九州中北部）勢力のリーダーとして倭王権の百済支援を担いながら、複雑な状況下の半島西南地域にて倭国の対外活動を代弁していたのではないか。しかし磐井は、こうしたネットワークが仇となり外交の一元化をめざす倭王権によって殺害される。つまり、磐井は倭王権を否定しておらずむしろその一端を担っていたので、反乱と言えるのかその実態が問われるが、その背後に対外交渉ルート上での王権・豪族間の対立による影響があったことは間違いなからう。ともあれ、磐井殺害後には倭国の対百済・半島西南地域との外交は田中史生氏の指摘のように王権に従属しながら行う形態に変質するが（田中史生 1997・2005）、磐井の登場でクローズアップされた北部九州の担う立場はその後引き継がれたと推察される。

ところで、磐井殺害後にはその子の葛子が跡を継ぐも筑紫君一族は弱体化し、北部九州では代わって南から肥君勢力が北上し拡大していったと考えられてきた。だが、律令期の戸籍などから筑紫国に肥君が多数存在することが確かめられる一方で、磐井の勢力圏を象徴する石人・石馬などの石製表飾が殺害後に菊池平野までを含み一層南に広がりを見せているのである。さらに次の史料には、

⑫百済王子恵請罷。仍賜兵仗良馬甚多。亦頻賞祿。衆所欽歎。於是、遣阿倍臣・佐伯連・播磨直、率筑紫国舟師、衛送達国。別遣筑紫火君、百済本記云、筑紫君児、火中君弟。率勇士一千、衛送弥互。弥互津名。因令守津路要害之地焉。（『日本書紀』欽明 17 年（556）正月条）

556年に倭に滞在した百済王子恵を百済に護送するために阿倍臣らと筑紫の舟師（水軍）を派遣し、別に筑紫火君に勇士千人を引率させて津路要害之地を守らせたとある<sup>8</sup>。このことは、6世紀中葉においても磐井を引き継ぐ筑紫火君が北部九州・倭国と百済地域との交流の中で活躍していたことを知らせてくれる。近年の研究では筑紫火君の実体が「筑紫君児・火中君弟」であることに着目され、火中君の弟の父（母）は筑紫君であって肥君と筑紫君の間に婚姻関係を想定し、『筑後国風土記』では両者が筑前・筑後の境界の神に共に祈っていることから当初より同盟関係にあったと指摘されている。どちらの氏族に重きを置くかで見解の違いはあるものの、筑紫君と肥君が結びつくことで一層勢力範囲を広げたと考えている（瓜生秀文 2009、宮川麻紀 2013）。ともあれ⑫から、筑紫火君は命に従って任務を遂行しており磐井殺害後の外交権の主体は倭王権に移っていたと考えられるが、彼らは王権の支配に組み入れられながらも磐井の築いた軍事力（水軍）・ネットワークを引き継ぎ、百済を

中心とする半島西南地域とのパイプを維持していたとみてよいだろう。

さらに、6世紀後半から7世紀の倭王権・北部九州と百済を中心とする半島との交流形態を考えるうえで、『日本書紀』敏達12年(583)条にみられる肥後の地方豪族である葦北国造阿利斯登の子日羅(～583)が百済の官位を有し、倭王権の外交に関与していることは興味深い(鬼頭清明1975、田中史生1997、有働智英2014など)。これによると、6世紀初めには父の阿利斯登が倭王権の大連大伴金村の指示で半島南部の加耶における倭の権益を保持するためにそこに派遣されたが、日羅も百済にて倭王権の外交的使命を担っていたことを伝える。百済王権に仕えた倭人(倭系百済官人)は数多くいたが(笠井倭人2000)、日羅は百済王から厚い信任を得て百済官位第2の達率(16等中)にまで昇っている。百済での彼の立場を一層示すのが、倭王権が日羅を召喚するために吉備海部直羽嶋を百済に派遣し日羅と会見させた際に、日羅の屋敷の前で韓語を話す韓婦が対応し羽嶋を屋敷の中に招いた記録である。つまり日羅は百済にも屋敷をもっており、韓語を話す人たちと分け隔てなく暮らし百済王権のために尽力していた様子が読み取れる。その一方で日羅は、敏達大王の命で倭国に帰国し、父の仕えた大伴金村を「我が君」と呼び大王へ忠誠を表し、倭・百済間に散在する諸問題から外交政策・国土防衛を進言しているばかりか、百済人が謀略をもって筑紫に渡航しようとしている極秘情報を伝えるなど、倭王権と従属関係にあったことが窺い知られる。そのことが原因か日羅は百済の使者によって暗殺されている。ただ、日羅の倭国帰国、国政への参加は、恩率・徳爾・余怒・参官等の百済官人を伴っていたことから、倭王権が百済に送ったスパイ的立場の日羅を極秘に呼び寄せたというのではなく、互いの外交・交流形態の中で臨機応変に実現されている事例とみなし得る。

このように磐井以来日羅一族にいたるまで、肥後・北部九州の豪族は半島西南部(特に百済)と独自のネットワークを築き対外交渉の中核を担っていた。日羅の例から窺われる交流の特質は、彼が倭王権・百済王権の二重に従属することによって両王権の紐帯の役割を果たし(田中史生1997)、倭・百済王権自身も九州の有力豪族の王権への二重の従属性を積極的に作り出していたことであった。つまり両王権の政治・外交・文化交流が、その地域との関係、人材なくしては不可能であったことを物語る。日羅暗殺記事をみても、参官一行は徳爾らに日羅暗殺を託して百済に帰国するが、血鹿(肥前国松浦郡値嘉)を經由しようとしている。さらに、日羅を暗殺した徳爾等の百済人を捕えたあとの処罰も、倭王権自身が判断せず日羅一族の出身地の肥国葦北君に委ねている(なお、日羅の遺骸も葦北へ運ばれ改葬されている)。このことは、肥後地域及びその豪族が両王権間の媒体・経由の役割を果たしていた

だけでなく、ネットワーク上の主体者であったともとれる。倭王権のみならず百済王権にとっても肥後・北部九州の勢力の援助は不可欠であって、そうした境界勢力が当時の外交交渉を成立に導いたとみるのが実態に近いのではないか。それら豪族が半島との交流において何を対価としたのかは定かでないが、肥後を含む北部九州は半島の先進文物・文化の集積地<sup>9</sup>、外交使節・渡来人の来航・停泊地、さらには居住地であって、それに見合ったメリットがあったのであろう。

さて日羅殺害事件後も、彼の出身地である肥後国葦北と半島西南地域（百済）は恒常的な交流・対外交渉が続いたと考えられる。次の『日本書紀』推古17年（609）夏4月条には、

⑬筑紫大宰奏上言、百済僧道欣・恵弥為首、一十人、俗七十五人、泊于肥後国葦北津。是時、遣難波吉士徳摩呂・船史竜、以問之曰、何来也。对曰、百济王命以遣於呉国。其国有乱不得入。更返於本郷。忽逢暴風、漂蕩海中。然有大幸、而泊于聖帝之边境。以歆喜。

百済僧を含む百済使がここに来航した様子を記している。彼らは元々隋に向かう使節であって漂着した百済人といえるが、暴風で流れ着くのが天草西岸や薩摩国が多いなか肥後国葦北津に来航したのは、彼らが歴史的にも百済と関係の深いここを地理的に認識していたからとみられる。推測の域をでないが下線部「泊」の語句が『日本書紀』では外交使節の停泊地点に使用されていることを根拠に、この609年の百済使もトラブルに遭い十分情報を得ていたこの場所に来航したという指摘もある（堤千乃1992、有働智瑒2014）。下線部のように百済使がここを聖帝之边境と評しているのは、百済人にとってもこれを報告した倭人にとっても、葦北津は両国の境界であったのではないか。まさにここは百済側からみれば倭国への窓口の一つであって、⑬はこのルートが7世紀以後も百済使によって恒常的に使用されていたことを示唆する。加えて、冒頭下線部は那津官家（536年設置）に置かれた筑紫大宰の初見記事であるが、この頃この場所を管理したのは奏上者の筑紫大宰であったことも窺い知られる。ただし肥後地域の歴史的な性格を踏まえれば、倭王権の権力が一方的に葦北津に介入したとみるよりは、肥後地域の有力豪族によるモノ・ヒト・情報を共有するネットワークの上位に那津官家・筑紫大宰が存在したと推察される。

以上、百済王権の立場に立ちつつ、6～7世紀の北部九州と半島西南地域の交流史を概観した。この後の史料がないため断定はできないが、白村江の時期までは、百済王権にとって北部九州との交流・外交は重要視されていたとみてよいだろう。

## (2) 熊津都督府における倭人の活動と北部九州

上では、白村江以前の北部九州と半島西南地域（百済）間の密接なネットワーク、交流史を概観した。それを踏まえれば、百済地域を占領した熊津都督府の時期にも両者の間で何らかの交流があったと推察される。さらに熊津都督府内には、かつて旧百済地域で活動した日羅など倭系官人のような倭人が存在したことを暗示する記録がみられる。熊津都督府は、②のように665年8月に唐勅使劉仁願の立会で熊津都督扶余隆（前百済太子）と新羅文武王の間で領土保全などを約束した会盟を実現させたが、その模様を詳述する次の『冊府元龜』をみると、会盟直後に下線部のように関係のない耽羅や倭人が出てくるのである。

⑭開府儀同三司新羅王金法敏・熊津都尉扶余隆、盟于百済之熊津城。初百済自扶余璋与高麗連和、屢侵新羅之地、新羅遣使入朝求救、相望於路。及蘇定方既平百済軍回、余衆又叛。鎮守使劉仁願・劉仁軌等、經略数年、漸平之。詔扶余隆、及令与新羅和好。至是、刑白馬而盟。先祀神祇及川谷之神、而後歃血。其盟文曰、……。劉仁軌之辞也。歃訖、埋書弊弊於壇下之吉地、藏其盟書於新羅之廟。於是、仁軌領新羅・百済・耽羅・倭人四国使、浮海西還、以赴太山之下。（『冊府元龜』外臣部 26 盟誓・高宗麟德 2（665）年 8 月条）

また同様の記録は次の史料にもみられる。

同盟于熊津城。劉仁軌以新羅・百済・耽羅・倭国使者浮海西還、会祠泰山。（『資治通鑑』麟德 2 年（665）8 月条）

麟德二年、封泰山。仁軌、領新羅及百済・耽羅・倭四国酋長、赴会。（『旧唐書』劉仁軌伝）

上の記録によると、会盟後に劉仁軌が新羅・百済・耽羅・倭国の四カ国の使を率いて泰山の封禪の儀に赴いているのがわかる。この封禪の儀は、同史料には儀礼の様子以外に準備段階からそれら 4 カ国を含む諸蕃酋長が扈従を率いて行列に従駕したことも記しており、唐帝国の国威を周辺諸国にアピールすべく乾封元年（666）正月に行われたのであった。それは当時の唐を中心とする東アジア情勢・秩序を物語っているので、熊津都督府のもと倭人を同行させたことはその対倭政策を伝える重要な事例であろう。

ともあれ、8月の会盟に当事者の百済と新羅以外に倭人などが直接参加していたと

は考えづらいが、当時の都督府内部地域に倭人がいたことは確かであろう。会盟をとりまく状況、会盟後の半島情勢にも倭が関係していたともとれる。さて、この倭人の実体については、最初に羅済会盟に着目した池内氏は抑留または残留した人々とみて会盟はもとより本国の倭国とは関係ない者とした（池内宏 1960）。これに対しそれらを倭国から派遣された公的使節と積極的に解釈する見解も出された（木宮泰彦 1955、日本古典文学大系 1965、鄭孝雲 1995）。後者の説によると、⑥には 665 年 是歳に守君大石らを唐に遣わしたとあるので、彼らが封禪の儀にも参加したという。守君大石らを分注のように送使とみるのみならず、当初から唐本国の儀礼に参加すべく派遣された使節とみなしている。しかし、この見解は鈴木氏が実証されたように成立しがたい（鈴木靖民 2011 b）。⑥の劉徳高らの倭国派遣（9 月）並びに帰国（12 月）時期をみると、その送使の守君大石一行は、同年 8 月の会盟に間に合わないのはもとより翌年正月の儀礼に参加することも困難であった。

したがって、この倭人は熊津都督府に滞在していた者たちとみて間違いない。とはいえそれらを都督府在留の倭人とみる見解の中にも、池内氏は外交と関係のない単なる在留民とみなす一方で、鈴木氏は本来的な意味において日本の朝廷の公的意思を呈していた使人と評価している。ただ既存の研究では、この倭人を倭国の側に立てのみ考えている。これまで論じたように、白村江以後 664 年から始まった対倭外交は都督府の主導によってなされていて、唐の封禪の儀に倭人を参列させたのも都督府の意思であった。とすれば、実際にそれを取り決めた熊津都督府の立場から在留する倭人との関係が検討されるべきであろう。

以上のように倭人は白村江以後も旧百済地域に滞在していたが、かつて磐井や日羅が時には百済（新羅）王権の立場から行動したように、彼らが都督府側で何らかの活動に従事することもあったのではないか。664 年からの戦後処理の対倭交渉も、倭人と百済遺民の関係を軸に既存のネットワークによって行われた部分も多かったと推察されるのである。さらにいえば倭人の地位は、百済鎮將劉仁軌がわざわざ唐の国家儀礼に参列させたことからみて、白村江前後の都督府支配下でも低い地位ではなかったとみてよいだろう。そうした倭人の具体的な例としては次の記録が参照される。

⑤十一月甲午朔癸卯、対馬国司、遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐四人、從唐来曰(1)、唐国使人郭務棕等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、総合二千人、乗船册七隻(2)、俱泊於比知島、相謂之曰、今吾輩人船数衆、忽然到彼、恐彼防人、驚駭射戰、乃遣道文等、予稍披陳来朝之(3)。（『日本書紀』天智十年（671）11 月甲午朔癸卯条）

やや後の671年であるが、唐（熊津都督府）は(1)の沙門道久・筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆・布師首磐の4人を、後述する(2)の唐人郭務悰一行の先発隊として対馬に送り、(3)のような事情を説明させている。その一人の筑紫君薩野馬は次の記録によると、

⑬詔軍丁筑紫国上陽咩郡人大伴部博麻曰、於天豐財重日足姬天皇七年、救百濟之役、汝為唐軍見虜。泊天命開別天皇三年、土師連富杼・氷連老・筑紫君薩野馬・弓削連元宝兒、四人、思欲奏聞唐人所計、緣無衣糧、憂不能達。（『日本書紀』持統4年（690）十月乙丑条）

白村江の戦で捕虜となりその後熊津都督府のもとにいたことを伝えている<sup>10</sup>。他の3人もほぼ同様の立場であったとみられる。いずれにしても、都督府は百濟遺民のみならず倭人たちを自身の傘下に組み込んでいたことがわかる。⑮(1)のように交渉内容が対馬国司を経て筑紫大宰府に無事伝達されていることから、彼らに対倭交渉の仲介役の任をとらせていたと考えてよいだろう。沙門道久のような僧侶が含まれているのは、当時の東アジアで一般的であった僧侶を介した外交形態とも一致している。

何より筑紫君薩野馬は、筑紫君の一員とみられ先代は筑紫火君や磐井につながる豪族であったと思われる。岩戸山古墳の西に近接する下茶屋古墳の被葬者は薩野馬前代の親族であろうとされている（柳沢一男 2014）。もう一人の韓嶋勝娑婆も、他の記録はないが韓嶋という氏からみて豊前国宇佐郡辛島郷出身の豪族と推定されている（日本古典文学大系 1965）。すなわち2名もが、歴史的に半島西南地域（百濟）とパイプを持つ北部九州と関係の深い豪族であったといえる。このことは、戦後の都督府においても百濟遺民と倭人たちの旧来のネットワークをかなりの割合継承・活用したことを示している。

ところで、こうした百濟遺民並びにそれと親交のある倭人を活用するスタイルは、都督府側のみならず倭国の側でも同様であった。⑯の戦後倭国が最初に唐（熊津都督府）に派遣した守君大石は、天智即位前紀8月条に百濟救援將軍の一人として名がみられ、百濟と関係の深かった人物であることがわかる。倭国も対百濟外交に従事してきた官人を積極登用し、百濟遺民とのパイプから都督府との関係を再構築しようとしたのではないか。なお⑰によると、守君大石らの倭国帰国は667年であって、百濟鎮將の権限下で司馬法聰らによって丁重に送り届けられている。とすれば、守君大石らは長期にわたり都督府に滞在していたことになり、倭国からの使節も都督府のもと



で両国の関係のみならず半島政策に関わることを任されていたのかもしれない。例えば666年10月から始まる唐の高句麗征討も、彼らが都督府に滞在していた時のことであった。

ともあれ白村江以後も、筑紫君薩野馬などが都督府の意向のもと倭国との外交のなかで活発に活動していたように、歴史的な北部九州と半島西南地域の交流は健在であったと思われる。まさにこの時期の熊津都督府の対倭政策は、旧百済の倭国・北部九州とのネットワークの影響を強く受けていたと考えられる。

#### 4. 郭務悰ら2千人来倭と熊津都督府の対倭認識

以上のように664年に始まった熊津都督府の対倭外交は、668年からは新羅も倭国に使者を直接派遣するようになるが（岡藤良敬1997、沈京美2000、延敏洙2003など）、ある程度良好な関係を維持していたといえる。そうしたなか前述の⑮によると、671年11月に唐使の郭務悰ら2千人の大船団が倭国に派遣されてきている。その⑮(2)の解釈については既存の研究でもいくつか出されているが、使節団は郭務悰が引き連れて来た600人の唐国使節と沙宅孫登に連なる1400人による47隻から成り立っていた。この使節団の郭務悰は、戦後最初の664年・665年の使節でも代表を務めた倭国と親密なパイプを有した半島駐在官の唐人である。また沙宅孫登は、唐将軍蘇定方が義慈王と共に洛陽に送り皇帝高宗に献上した50余人の百済貴族の一人であった<sup>11</sup>。沙宅氏は佐平沙宅智積をはじめとして、百済王権で政治・外交の中枢にいた有力貴族である（李道学2010）。孫登も、前述の禰軍と同じようにかつての百済での能力を買われて、滅亡後は熊津都督府に登用され半島政策・対倭外交を任された百済遺民であったとみられる。それゆえ沙宅孫登が率いてきた1400人も、彼のもとにいた百済人であったと第一に考えられる。

使節団の性格については、同行した人々を百済人難民と考えたのは池内氏が最初であるが、それを発展的に解釈した鈴木氏の難民輸送説が最も有力である（井上光貞1981）。鈴木氏は、新羅との対立の中で直前の同年正月に倭に派遣した李守真の交渉（後述の⑱）が効果をもたらさなかったため、百済避難民を届けて倭側の都督府に対する好意的態度を引き出そうとしたという（鈴木靖民2011b）。加えて近年では、派遣目的はそれと同様に緊迫する半島情勢の中で倭から支援を引き出そうというものであるが、それらを百済人ではなく倭国の関心を最も引き出せた白村江の際の捕虜及び遣唐使関係者、すなわち倭人と考える見解も多くみられる（松田好弘1980、直木孝次郎1988、新蔵正道1990）。ただ後者の説は、戦後の都督府と倭国

の外交関係の中でそれほど大多数の捕虜が671年まで抑留されていたとは考えられず、万一それらが白村江で戦った捕虜であるとすれば『日本書紀』にそのことが明記されていると思われるなど、多くの点で疑問が残る。また前者の説も、百濟人難民を倭国に輸送したところで倭国から賛辞が得られるのか疑問であり、何より唐人が600人含まれていた理由がもう少し明らかにされなければならないだろう。

ひとまず上の問題は保留し、諸説でも強調された671年前後の半島情勢を確認しておく。⑧・⑨を含む『三国史記』文武王十年(670)・11年(671)条によると、新羅が670年3月薛烏儒ら2万名を送り鴨緑江付近で勝利後、7月以降は一層熊津都督府に対する攻勢を強め、文武王自ら出征し合わせて82城を攻略し次々と旧百濟領域を奪取していた。671年に入ると都督府は唐本国に援軍を要請したが、新羅は中心部の加林城まで侵入し6月に石城の戦闘で勝利すると、7月頃には泗泚(扶余)を占領し所夫里州を設置したという。すなわち熊津都督府からみれば、没落したことを意味するだろう。この後10月には両者は海上で次のごとく激しい戦闘を繰り広げたが、

⑰冬十月六日、撃唐漕船七十余艘、捉郎将鉗耳大俟、士卒百余人、其淪没死者、不可勝数、級飡当千功第一授位沙飡。(『三国史記』文武王11年(671)冬10月条)

都督府側は漕船70隻以上で対抗するも新羅水軍に大敗している(徐榮教2006、李相勲2012)。とはいえ、都督府側はそれに対して黙ってみていたのではなく、『三国史記』12年(672)条によると翌672年2月から反撃に転じており、8月には韓始城・馬邑城などを攻めて京畿道・黄海道一帯で衝突し新羅軍を破り、9月には⑱にみられるように新羅王が謝罪使を遣わし捕虜を送還したのであった。なお、この捕虜の中に山東半島に位置する萊州の司馬王芸がいたことから、上の⑰の新羅に敗れた唐水軍は、唐本国から熊津都督府に向かう兵士・軍事物資を乗せた輸送船団であったという主張もみられる(李相勲2012)。

ともあれ、郭務倞ら2千人はそうした半島情勢の中で倭国に派遣されたのであった。繰り返しになるが既存の見解では、大船団の実体として難民と捕虜の違いはあるが、熊津都督府は数か月前の正月に次のように上表文まで持たせた使節を遣わしたものの、

⑱百濟鎮將劉仁願、遣李守真等上表。…秋七月丙申朔丙午、唐人李守真等百濟使人等、並罷歸。(『日本書紀』天智十年(671)条)

倭国の反応が思わしくなかったため、さらなるアピールを目指したとされている。つまりそれらは、新羅との戦闘のために倭の軍事的支援を引き出すための手段であったという解釈である。しかしながら、唐は戦後当初より倭国に対して関係を修復しようとしたが、自身の敗戦国という認識は強く持っていたと考えられる。既存の見解は、当時の熊津都督府の対倭認識とかけ離れた説であって、日本古代史の立場から倭国を過大評価したものであろう。とすれば、この2千人も倭国を喜ばせる避難民や捕虜といえないのはもとより、これを再考することで派遣した側の熊津都督府の対倭政策・認識は一層明らかになるとと思われる。

ここで改めて⑮(3)をみると、2千人の装いとして対馬の防人が襲撃してもおかしくなかったことを伝える。すなわち使人の風貌とは異なり、武装した船団であったことが窺い知られる。さらにこれは、⑰に描かれる新羅水軍と激突して敗れた唐水軍と同等な様相を彷彿とさせる。⑮(47隻)と⑰(70隻)では船団の数も比較的近く、古く森克己氏などによって提唱されたような軍人説(森克己1955、鈴木治1995)は十分成り立つと考えるのである。しかし先に指摘しておきたいが、森氏などが主張するように倭国を威嚇するための軍人集団であったとは到底考えられない。このことは先学の指摘の通りであるが、次の記録も参照される。

⑲遣内小七位阿曇連稻敷於筑紫、告天皇喪於郭務悰等。於是、郭務悰等、咸着喪服、三遍拳哀。向東稽首。壬子、郭務悰等再拜、進書函与信物。(『日本書紀』天武元年(672)春3月条)

郭務悰らは来倭後書函と信物を進めて修好を結ぶことに努めており、天智大王の死去直後に筑紫に滞在する使節にそれを告げた際には彼らも哀悼の礼を行うなど、武力による威嚇ととれるような行為は一つもみられない。このときの書函の文は『善隣国宝記』<sup>12</sup>のなかにみられ、のちの呼称である「日本国天皇」を記すなど後世の潤色も含まれているが、都督府が外交形式に則って郭務悰らを派遣したことを示唆する。加えてこのときの信物は、『日本書紀』持統6年(692)閏5月己酉条に「詔筑紫大宰率河内王等曰・復上送大唐大使郭務悰爲御近江大津宮天皇所造阿弥陀像」とあることから、郭務悰らは天皇に贈るために阿弥陀仏像を持参してきたことが窺い知られる。当時の東アジアでは外交のなかで仏教の果たす役割は強く、精神的にも倭国から賛同を得ようとしていたと推察される(近藤浩一2014)。ともあれ、2千人の実体が軍人(都督府水軍)であったとしても、倭国を攻撃したり威圧するものでなかったことは明白である。

それでは再度、軍人説にたちこの使節団の性格を考えてみる。上に指摘したように、沙宅孫登ら旧百濟官人のみならず倭人を登用し彼らに水先案内・実務的な交渉を任せていたことが、当時の熊津都督府と倭国間の外交の実体であった。それら倭人は、筑紫君薩野馬・韓嶋勝娑婆は有明海を含む北部九州一帯でネットワークを有した氏族であって、僧侶の沙門道久を含めて旧来から交渉能力に長けていた者であった。しかも都督府側は、防人の位置まで十分認識しているなど、日本の防衛体制を熟知していたとみられる。とすれば、この大船団は半島情勢、新羅との戦闘のなかで派遣されたのであって、ある程度周到な準備のもとで成し遂げられていたといえる。すなわち、664年から始まる対倭外交の中で何らかの取り決めがなされていて、想定外の出来事とはいえなかったのではないか。大船団を率いてきた郭務悰も書函・仏像など信物を持参するなど倭国側にこの使節を受け入れてもらうように善意を示しており、倭国側も次のように急がず無難に対応しているのが確かめられる。

⑳以甲冑弓矢、賜郭務悰等。是日、賜郭務悰等物、総合繩一千六百七十三匹・布二千八百五十二端・綿六百六十六斤。(『日本書紀』天武元年(672)夏5月壬寅条)

そしてこの㉔でやはり注目されるのは、大量の繩・布・綿より先に武器(武具)である甲冑・弓矢をまず供給している点である。これはまさに彼らの実体が兵士であることを物語っている。ここで改めて問題になるのが㉕(2)の「送使」の語句の解釈である。鈴木氏はこの部分について国史大系本以外にも各諸本を入念に精査され、「送使」はもともと寛文9年の底本では「送」のみであったのが、後に校訂者が4人の帰国と関連させて倭人たちの「送使」とするのがよいということで「使」を加えたと指摘する(鈴木靖民2011b)。ゆえに鈴木氏はこの部分を「郭務悰ら唐人600人が沙宅孫登ら百濟人1400人を送る」と解釈するが、これには私もほぼ同意する。ただ私は、倭国に送った側は唐人(都督府官人)であっても、送られたのは百濟人避難民ではなく、唐人を主体とする多数の百濟人の兵士であったと考えておきたい。

以上を踏まえると、この時都督府側は倭国を後背基地として期待(ある程度そのように認識)していたのではないか。671年11月に倭国に兵士を送ったのも、同年の新羅との戦闘(特に㉗の海上での敗戦)によるものとみられ、倭国を拠点に体制を整え再起をはかろうとしたと推察される。その甲斐もあってか、唐側は翌年に入ると攻撃に転じており新羅から謝罪(㉘参照)をとりつけている。白村江勝利直後から唐(熊津都督府)が倭国と交渉をもったのは、戦勝国としての半島支配に付随した対倭政策の一環であって、旧百濟の半島西南地域と倭国の歴史的なルートを押さえることで、

とりわけ有事の際などに敗戦国の倭国を利用しようと当初から考えていたためといえよう。

### おわりに

百済滅亡後に唐がその故地に設置した熊津都督府は、663年の白村江勝利直後の翌年（664）から倭国と戦後処理をめぐる交渉をスタートさせていた。そのなかで戦後の都督府は、旧百済官人はもとより倭人を積極登用して旧来からの両者のネットワークを活用した外交を展開しており、その中核には肥後を含む北部九州の豪族も存在したことを指摘した。

唐が当初よりこうした外交を展開した背景には、戦勝国としての半島支配に付随し、旧百済の半島西南地域と北部九州の歴史的なルートを押さえることで、有事の際などに敗戦国の倭国を利用することにあった。例えば671年に都督府は新羅との戦闘の敗戦から再起をはかるため倭国に多数の船団を遣わし、倭国を半島占領のための後背基地（食糧や武器の補給場所）として活用した様子が垣間見られる。

なお最後に若干今後の課題を述べたいが、翻ってみるに北部九州は交流の所産によって、百済滅亡後・白村江直後においても半島西南地域からのモノ・ヒト・情報を日本列島のなかで最も早くリアルに体感するところであったに相違ない。そのため、半島勢力とネットワークを有した豪族は倭国内でもいち早く対処に迫られ、倭王権のみならず新たに置かれた熊津都督府に対しても対外的危機の解消と交通の安定を求めたことも十分想起される。既存の研究では白村江直後の倭国内の状況として、倭王権が北部九州・瀬戸内を中心に防衛施設として古代山城を築城したことに関心が集まっている。こうした点も本稿を踏まえれば、これがまさに熊津都督府の対倭外交が開始される同時期であったことと、それに付随した現地の豪族たちの動向に一層注目すべきであろう。詳細は、別稿で論じてみたい。

### 注

- 1 池内宏 1960、木宮泰彦 1955、森克己 1955、鬼頭清明 1981、鈴木靖民 2011a・b、新藏正道 1990、森公章 1999・2006、仁藤敦史 2019。その他には、松田好弘 1980、直木孝次郎 1988、鄭孝雲 1995、大庭脩 1996、堀敏一 1998、沈京美 2000、延敏洙 2003、中野高行 2010、李道学 2010、李成市 2014、中村修也 2015などを参照。

- 2 『唐会要』百濟伝、『資治通鑑』高宗顯慶5年(660)8月条など。詳細は、盧重国 2003、方香淑 1994、梁鍾国 2009、盧泰敦 2009、朴芝賢 2013、李成市 2014 を参照。
- 3 『三国史記』文武王3年(663)夏4月条、『旧唐書』新羅伝。詳細は、注2の論著を参照。
- 4 その他にも、荊木美行 2012、葛継勇 2012、金榮官 2012、権恵永 2012、拝根興 2012、古代東アジア史ゼミナール 2012、西本昌弘 2013、金子修一 2013、金英心 2014 を参照。史料⑩の全体の釈文は、古代東アジア史ゼミナール 2012 にしたがった。なお、陝西省西安市長安区郭杜鎮からは、禰寔進、禰素士、禰仁秀という百濟から唐に帰順した禰氏三代とみられる家族墓三基と墓誌が発見されている(金榮官 2012)。「禰軍墓誌」もこの付近で出土したと推定されており、これら4つの墓誌の総合的な検討が必要である。
- 5 禰軍は、613年ごろ泗泚(扶余)で生まれ、630年代に武王との関係を通じて百濟の政界に進出したと推定されている(金榮官 2012)。
- 6 金洛中 2002、洪潛植 2006、福永伸哉 2007 の研究も参照。なお金洛中 2002 では、全羅南道の倭系古墳の被葬者を、国際交易を担った交易集団としている。
- 7 筑紫国造磐井、陰謀叛逆、猶預経年。恐事難成、恒伺間隙。新羅知是、密行貨賂于磐井所、而勸防遏毛野臣軍。於是、磐井掩拋火豊二国、勿使修職。外邀海路、誘致高麗・百濟・新羅・任那等国年貢職船、内遮遣任那毛野臣軍、乱語揚言曰、今為使者、昔為吾伴、摩肩触肘、共器同食・・・(『日本書紀』継体 21年(527)6月条)。
- 8 この時期は百濟と新羅の対立が激化し、百濟の聖王が戦死するという緊迫した状況下であった。
- 9 有働智奘 2014 は、豊国の八幡神の成立も百濟から肥後に伝来した仏教が肥後経由で豊国に伝えられた影響であるという。興味深い指摘である。
- 10 この記録は、持統4年(690)9月に帰国した大伴部博麻に褒賞を与えた際の詔である。この内容によると、博麻の尽力により筑紫君薩野馬らは天智3年(664)に解放され、その時帰国したとも解釈できるようである。それならば、薩野馬は671年までの間に再度半島の都督府配下に渡っていた可能性も想定できることになる。
- 11 百濟王義慈、其妻恩古、其子隆等、其臣佐平千福・国弁成・孫登等、凡五十余、秋七月十三日、為蘇將軍所捉、而送去於唐国(『日本書紀』齊明6年(660)冬10月条)。加えて『日本書紀』齊明6年秋7月条の「伊吉連博徳書」には、沙宅孫登の名はみられないがこの一行が皇帝の恩勅で釈放されたことを記している。
- 12 天智天皇十年、唐客郭務棕等来聘書曰、大唐帝敬問日本国天皇、云云、天武天皇元年、郭務棕等来、安置大津館、客上書函題曰、大唐皇帝敬問倭王書、又大唐皇帝勅日本国使衛尉寺少卿大分等書曰、皇帝敬到書於日本国王(『善隣国宝記』卷上 天智天皇十年(671)条)。

## 参考文献

- 池内宏 1960 「百濟滅亡後の動乱及び唐・羅・日三国の關係」『滿鮮史研究上世第二冊』吉川弘文館
- 井上光貞 1975 「大化改新と東アジア」『岩波講座日本歴史 2』岩波書店
- 荊木美行 2012 「祔軍墓誌の出現とその意義」『皇學館論叢』45
- 有働智瑛 2014 「古代肥後における仏教伝来—百濟達率日羅と鞠智城出土遺物を中心として—」『鞠智城と古代社会』2
- 瓜生秀文 2009 「筑紫君磐井の乱後の北部九州」『日本古代の思想と筑紫』權歌書房
- 延敏洙 2003 「統一期の新羅と日本の關係—公的交流を中心に—」『古代韓日交流史』ヘアン
- 王連龍 2011 「百濟人『祔軍墓誌』考論」『社会科学戦線』7月号
- 大庭脩 1996 『古代中世における日中關係史の研究』同朋舎出版
- 岡藤良敬 1997 「七世紀中葉～九世紀の日羅關係—九州地域史の視点から—」『福岡大学人文論叢』28
- 小田富士雄編 1985 『石人石馬』学生社
- 小田富士雄編 1991 『古代を考える磐井の乱』吉川弘文館
- 葛継勇 2012 「『祔軍墓誌』についての覚書」『東アジア世界史研究センター年報』6
- 笠井倭人 2000 「欽明朝における百濟の対倭外交」『古代の日朝關係と日本書紀』吉川弘文館
- 金子修一 2013 「彌氏墓誌と唐朝治下の百濟人の動向」『日本史研究』615
- 鬼頭清明 1975 「日本民族の形成と国際的契機」『大系日本国家史—古代』東京大学出版会
- 鬼頭清明 1981 『白村江 東アジアの動乱と日本』教育社歴史新書
- 木宮泰彦 1955 『日華文化交流史』富山房
- 金榮官 2012 「中国発見百濟遺民彌氏家族墓誌銘の検討」『新羅史学報』24
- 金英心 2014 「遺民墓誌からみた高句麗・百濟の官制」『韓国古代史研究』75
- 金洛中 2002 「五～六世紀の榮山江流域における古墳の性格」『前方後円墳と日朝關係』同成社
- 権憲永 2012 「百濟遺民彌氏一族墓誌銘に対する断想」『史学研究』105
- 洪漕植 2006 「韓半島南部地域の倭系要素—3～6世紀を中心に—」『韓国古代史研究』44
- 古代東アジア史ゼミナール 2012 「祔軍墓誌訳注」『史滴』34
- 近藤浩一 2014 「六世紀百濟の思想的基盤と天下觀の形成」『京都産業大学日本文化研究所紀要』19
- 崔尚基 2014 「『祔軍墓誌』の研究動向と展望—韓・中・日学界の議論事項を中心に—」『木簡と文字』12
- 佐藤信 2005 「六世紀の倭と朝鮮半島諸国」『日韓歴史共同研究報告書（第I期）』

- 篠川賢 2010 「日本列島の西と東」『日本の対外関係 1』吉川弘文館
- 徐栄教 2006 『羅唐戦争史研究—弱者が選択した戦争』亜細亜文化社
- 末松保和 1996 「百済の故地に置かれた唐の州県について」『高句麗と朝鮮古代史 末松保和朝鮮史著作集 3』吉川弘文館
- 鈴木治 1995 『白村江—古代日本の敗戦と薬師寺の謎』学生社
- 鈴木靖民 2011 a 「七世紀後半の日本と東アジアの情勢—山城造営の背景—」『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館
- 鈴木靖民 2011 b 「百済救援の没後の日唐交渉—天智紀唐関係記事の検討—」『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館
- 田中史生 1997 「「帰化人」論神考—古代における人の王権・国家への帰属の問題—」『日本古代国家の民族支配と渡来人』校倉書房
- 田中史生 2005 『倭国と渡来人—交錯する「内」と「外」』吉川弘文館
- 玉名歴史研究会編 2002 『東アジアと江田船山古墳』雄山閣
- 沈京美 2000 「新羅中代の対日関係に関する研究」『統一新羅の対外関係と思想研究』白山資料院
- 堤千乃 1992 「古代の葦北」『異国と九州—歴史における国際交流と地域形成』雄山閣
- 鄭求福他 1997 『訳注三国史記 注釈編（下）』韓国精神文化院
- 鄭孝雲 1995 『古代韓日政治交渉史研究—6・7世紀の韓日関係史を中心に—』学研文化社
- 東野治之 2012 「百済人祢軍墓誌の『日本』」『図書』756
- 直木孝次郎 1988 「近江朝末年における日唐関係」『古代日本と朝鮮・中国』講談社
- 中野高行 2010 「天智朝の帝国性」『日本歴史』747
- 中村修也 2015 『天智朝と東アジア—唐の支配から律令国家へ』NHK 出版
- 新蔵正道 1990 「「白村江の戦」後の天智朝外交」『史泉』71
- 西本昌弘 2013 「祢軍墓誌の『日本』と『風谷』」『日本歴史』779
- 日本古典文学大系 1965 『日本書紀 下補注』岩波書店
- 仁藤敦史 2019 「7世紀後半の国際関係と古代山城」『鞠智城・古代山城シンポジウム 2018 成果報告書』熊本県教育委員会
- 福永伸哉 2007 「継体大王と韓半島の前方後円墳」『福勝寺古墳の研究』大阪大学文学研究科
- 堀敏一 1998 「唐初の日唐関係と東アジアの国際政局」『東アジアのなかの古代日本』研文出版
- 方香淑 1994 「百済故土に対する唐の支配体制」『李基白先生古稀記念韓国史学論叢〔上〕古代篇』韓国史学論叢刊行委員会
- 朴芝賢 2013 「熊津都督府の成立と運営」『韓国史論』59
- 朴天秀 2007 『加耶と倭 韓半島と日本列島の考古学』講談社



- 朴天秀 2008 「柴山江流域における前方後円墳からみた古代の韓半島と日本列島」『古代日本の異文化交流』勉誠出版
- 水谷千秋 2013 『継体大王と朝鮮半島の謎』文藝春秋
- 松田好弘 1980 「天智朝の外交について—壬申の乱との関連をめぐって—」『立命館文学』415  
～ 417
- 宮川麻紀 2013 「鞠智城築城の背景—肥君の拠点と交通路の複眼的検討—」『鞠智城と古代社会』  
1
- 森克己 1955 『遣唐使』至文堂
- 森公章 1999 『白村江以後』講談社選書
- 森公章 2006 『戦争の日本史—東アジアの動乱と倭国』吉川弘文館
- 柳沢一男 2014 『筑紫君磐井と「磐井の乱」・岩戸山古墳』新泉社
- 山尾幸久 1999 『筑紫君磐井の戦争 東アジアのなかの古代国家』新日本出版社
- 李相勲 2012 「新羅水軍の活動と制海権掌握」『羅唐戦争研究』周留城
- 李成市 2013 「祢軍墓誌研究—祢軍の外交上の史跡を中心に—」『木簡と文字』10
- 李成市 2014 「六～八世紀の東アジアと東アジア世界論」『岩波講座 日本歴史第3巻古代3』岩波書店
- 李道学 2010 「熊津都督府の対日本政策」『百済泗泚城時代の研究』一志社
- 梁鍾国 2009 「百済復興運動と熊津都督府」『百済文化』35
- 盧重国 2003 「唐の旧百済地域支配」『百済復興運動史』一潮閣
- 盧泰敦 2009 『三国統一戦争史』ソウル大学校出版部